

◆別府由佳(3年) Yuka Beppu

B. バルトーク：ピアノ協奏曲第3番 (演奏時間約25分)

山口県出身。

全日本学生音楽コンクール東京大会高校生の部奨励賞。吹田音楽コンクール デュオ部門第2位(最高位)。フツペル平和祈念鳥栖ピアノコンクールソロコース第3位。

大田真理子、高橋高代、堀江真理子、杉谷昭子、角野裕の各氏に師事。

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、現在東京芸術大学器楽科3年在学中。

1945年9月26日、バルトークは二つの協奏曲を未完成にしたままこの世を去りました。一つはヴィオラ協奏曲、もう一つがピアノ協奏曲第3番です。

ピアノ協奏曲第3番は、すぐれたピアニストであり、妻であるディッタ・パーストリへ捧げられました。当時白血病の末期段階だったバルトークは自らの死期を悟り、自分の死後もディッタがピアニストとして生きていけるように、彼女の誕生日に合わせてこのピアノ協奏曲を作曲しました。

そのため、この協奏曲には若い頃の彼のような攻撃的で革新的な作風は全くなく、痛々しいほどに透明感のある作品になっています。

第1楽章 Allegretto

バルトークはルーマニア民謡について深く研究していて、田舎の人々の素朴で飾り気のない歌に心を奪われていました。第1楽章で最初にピアノが演奏するメロディには、そのルーマニア民謡のメロディが用いられています。

コロコロと表情が変わる、素直で無邪気な人間味あふれる曲です。

第2楽章 Adagio religioso

バルトークの作品中もっとも美しい曲の一つで、弦楽器とピアノの対話には、静かな祈りと痛みが感じられます。religiosoとは、「敬虔に」という意味であり、死後の世界への信仰、愛する人と別れなければならないことへの悲しみ、身体的な苦痛が、この曲を崇高な世界まで高めています。

中間部では鳥の鳴き声が、管楽器とピアノによって演奏されます。夜中から夜明けまでの、森から聞こえてくる音を見事に描写しています。それは、衰弱した夫の姿に苦しみ悩むディッタを、「いつかは夜明けがくる」と励ましているように感じられます。

第3楽章 Allegro vivace-Presto

歓びに満ちあふれた華やかなフィナーレです。バルトークは、この曲の最後17小節を完成させることなく、亡くなりました。そこに遺されたのは、17小節分の小節線と、Vege(終わり)という言葉だけでした。

バルトークは、ディッタ以外の方がこの協奏曲を弾く事を禁止していましたが、彼の死後、夫の不在を受け入れる事ができず精神不安定になってしまったディッタは、1960年代になって初めて録音をしたものの、1982年に亡くなるまで生涯コンサートでこの曲を弾く事はありませんでした。

(別府 記)

(裏へ続く)



◆加藤陽子(4年) Yoko Kato

A. ドヴォルザーク：チェロ協奏曲 口短調 作品104 (演奏時間約40分)

1986年生まれ。5歳よりチェロを始める。2000年札幌ジュニアチェロコンクール優秀賞。2002年第2回泉の森ジュニアチェロコンクール高校生以上の部金賞。2006年第7回ビバホールチェロコンクール第3位。東京芸術大学内にて福島賞、安宅賞受賞。ハンブルク音大主催夏期国際メンデルスゾーン音楽アカデミーにてアルト・ノラス氏のマスタークラスを受講し、ソリストとしてMinsker室内オーケストラと共演。六花亭「チェロとピアノの夕べ」、JTアートホール「アフタヌーンコンサート」などに出演。

室内楽では、原村室内楽セミナーにて奨励賞。ウィーン国立音大主催夏期国際室内楽アカデミーにてArtis-Preisを受賞。学内では室内楽定期演奏会などに出演。これまでに、室内楽を岡山潔、山崎伸子の両氏に、チェロを中島顕、寺田義彦、河野文昭、山崎伸子の各氏に師事。東京芸術大学附属音楽高等学校を経て、現在、東京芸術大学器楽科4年在学中。

第1楽章 Allegro

第2楽章 Adagio ma non troppo

第3楽章 Finale. Allegro moderato

ドヴォルザークは1892年にアメリカに渡りました。交響曲「新世界」や弦楽四重奏曲「アメリカ」など数々の傑作が生み出されたこの2年間のアメリカでの生活の中で、最後を締めくくったのがこのチェロ協奏曲です。当初は初めて見る新大陸の活気に満ちた生活や、黒人霊歌、インディアンの音楽に新鮮な魅力と親近感を覚えましたが、ボヘミアの田園に育ったドヴォルザークは、だんだんとアメリカでの生活が嫌になり、日がたつにつれて祖国がなつかしくなっていくばかりでした。そんな時にこの曲はつくられ、祖国ボヘミアへの深い愛、強い郷愁の念が1・2楽章に、終楽章では帰国の喜びがうたわれています。アメリカの民族音楽が五音音階の旋律法に表れ、彼が終生変わらない愛情を注いだボヘミアの民族音楽とアメリカ民謡のもつ哀愁を帯びた叙情性は、緊密に融合されています。

しかし、この曲にもられた感情はそれだけではありません。もうひとつこの曲には深い感情が込められています。作曲中に初恋の人であるヨゼファが重い病気であることを知り、ドヴォルザークは彼女への思いをこめてヨゼファが好きだった自作の歌曲、<Kez duch muj sam 私をひとりにしておいて>を2楽章に取り入れました。しかし、ついに彼女は他界してしまいます。一度は完成していたこのチェロ協奏曲を再びとりあげ、ドヴォルザークは3楽章の最後に60小節を新たに加えてヨゼファへの思いをこめました。新たに加えられたこのコーダは、思い出を振り返り、この世で出会えたことへの感謝、静かな祈り、そして悲しみを振り切り未来を見つめるかのような管弦楽による力強い終結でした。

「こんなチェロ協奏曲が人間の手で書けるということ、私はどうして気がつかなかったのだろう？もし気がついていたら、とっくに私自身が書いていただろうに！」とブラームスを感じさせたほどのこの傑作。私の憧れの曲。あの感動を自分の手で奏でてみたくて、初めて弾かせてもらえたときのことは忘れられません。こよなく愛した祖国、そして大切な人ヨゼファへの2つの思いがこめられたこの曲。ドヴォルザークの思いを心に響かせて、皆様と共に感じることできたらとても嬉しく思います。

(加藤 記)